国際シンポジウム「玄宗皇帝と聖武天皇の時代」

古墳壁画は唐から

皇帝陵 他の墓と差別化

710年に平城京に遷都され、日本が国際的に本格的なデビューを果たした当時、東アジアを中心とした国際社会をリードしていたのが中国・唐王朝だ。皇帝たちは、都が置かれた長安（西安市）の近郊にある唐皇帝陵群（唐十八陵）に眠る。皇帝陵の実態は謎に包まれているが、近年の発掘調査で少しずつ分かってきた。その一端を紹介する。【高島博之】

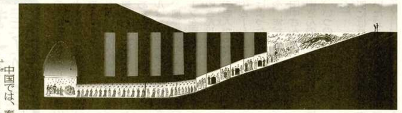
中国では、秦の始皇帝から清の愛新覚羅溥儀まで、最高権力者を「皇帝」と称し、皇帝の墓だけを「陵」と呼んだ。皇族などの場合は「墓」とされ、規模や埋葬施設の形態、副葬品などに厳格な違いがある。

中国・唐は618年、李淵（高祖）、李世民（太宗）親子により建国され、都は長安（陝西省西安市）に置かれた。長安の北部に連なる北山山脈沿いの東西約140㌔の範囲には、18基の歴代皇帝の陵が築かれ、総称して「唐十八陵」と呼ばれる。標高1000㍍前後の山全体を数㌔にわたって塀で取り囲んだ「山陵形式」が大半を占め、日本の古墳とはスケールの違いが歴然としている。

唐十八陵のうち4基は土を盛り上げて造る墳丘形式で、残る14基は山全体を陵とする山陵形式を採用。いずれも、墳丘や山を瓦ぶき屋根の塀で二重に取り囲んでいる。内側は「内陵園」、外側は「外陵園」と呼ばれ、最大の橋陵は約3㌔四方の内陵園があった。

陵園から延びる神道という道路沿いには、獅子や馬などの巨大な石像物が並べられたほか、皇帝が服属させた周辺国の王の石像などが置かれた。内陵園には、皇帝が生前暮らした宮殿を再現したとみられる寝殿が建てられた。埋葬施設は、山や墳丘に長いトンネルを掘り、地下深くに設けられた。トンネルの途中にいくつもの小部屋が造られ、貴族や侍女、動物などをかたどった陶器製の像「俑」など多くの副葬品が置かれた。トンネルに門を設け、盗掘を防ごうとした跡が残っている。

トンネルの壁面には、亡くなった皇帝を不老長寿の仙郷に導く仙人や、青龍・白虎などの巨大な四神図、仕えた人々の行列が描かれている。李憲の恵陵で発見された青龍と白虎の壁画は、それぞれ縦3・3㍍、横7㍍の巨大サイズだった。



上 人々が出入りする様子を示した譲皇帝陵・恵陵の断面模式図 下 山全体を利用した皇帝陵・乾陵＝いずれも奈良県立橿原考古学研究所付属博物館提供

図像 2系統に分類

韓釗・西安碑林博物館副館長によると、唐代の皇帝や皇族などの陵墓の発掘で、壁画が見つかったものは100基以上ある。一方、日本では、奈良県明日香村の高松塚古墳（7世紀末〜8世紀初め）とキトラ古墳（同）の2基だけだ。しかし、両古墳の壁画は、中国の壁画に見られる2系統の図像をそれぞれ受け継いでおり、唐との交流が日本の埋葬のあり方に深く影響していたことをうかがわせる。

国際シンポジウムに参加した韓氏の研究によると、唐代の壁画墓は、貴族の邸宅などの情景を描いた現実的な図像と、古代中国の宇宙観に基づき、被葬者を不老長寿の仙人のいる場所に導く図像の2系統あるという。

高松塚、キトラ両古墳には、いずれも青龍や白虎などの四神像が描かれている。韓氏はこのほかに、高松塚では宮廷などに仕える男女の人物像、キトラは天空などの宇宙観を表現する十二支像が描かれていることに着目。高松塚は、貴族の邸宅内外の情景を表現する現実的な図像の系統で、キトラは、宇宙観を表現することによって邪気を鎮め、被葬者の魂が永遠の仙郷（仙人の住む所）に昇っていくように導く図像の系統に属するとしている。

高松塚、キトラ両古墳が築かれたのは、唐の長安をモデルにした最初の条坊制の都・藤原京の時代に当たる。朝廷は7世紀中ごろから、遣唐使を盛んに送り、唐の先進的な文化や制度を取り入れた。こうした中、墓の壁画の図像も、唐の陵墓にならって描かれたとみられる。

韓氏は「唐代壁画墓における2種の図像系統が、日本の7世紀末〜8世紀初頭の壁画古墳に同時に出現したことは全く不思議なことではない」と指摘している。

「青龍」「白虎」が描かれている壁画の模写＝山本晋撮影

にらみをきかせる壁画「武人図」＝陝西省考古研究院蔵

「青龍」「白虎」が圧倒

「大唐皇帝陵」展 開催中

平城遷都1300年を記念して、中国・唐の皇帝陵などの一級考古資料を展示する春季特別展「大唐皇帝陵」が、奈良県立橿原考古学研究所付属博物館（橿原市畝傍町）で開かれている。皇帝陵や皇族墓から出土した壁画や人や動物をかたどった陶俑、銅製の鏡など100点を展示している。主な見どころを紹介する。

スケールの大きさに驚かされるのは、死後に皇帝号が贈られた李憲（741年没）の恵陵で発見された壁画の模写だ。青龍と白虎が描かれ、いずれも縦3・3㍍、横7㍍の実物大。ともに頭部を墓の入り口側に向け、前肢を前に伸ばして天空を飛翔する姿で、皇帝陵にふさわしい巨大さを誇る。

「跪拝俑」（全長1㍍）は、墓に副葬された陶俑の中でも特殊で、特大サイズだ。日本の国宝に当たる「一級文物」に指定されている。頭に冠をいただき、正装して神妙な表情で最敬礼する文官。衣服には位の高さを示す赤の彩色が残り、袖口には金があしらわれている。

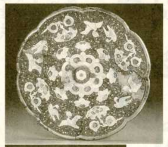
墓室の入り口に置かれ、邪気を払い、被葬者を護る奇怪な獣像が「鎮墓獣」。通常は牙をむき出したり、目やまゆをつり上げて恐ろしい顔つきをしているが、「加彩貼金人面鎮墓獣」は、普通の人のすました顔だ。しま模様の猛獣の体とのアンバランスな合体はユーモラスな半面、静かな不気味さも漂う。

馬に乗った男たちが馬球（ポロ）を楽しむ様子を描いた壁画「馬球図」（縦1・3㍍、横3㍍）。赤組と黄組に分かれた騎手たちが交錯し、小さな球を狙う瞬間の動きをとらえたダイナミックな構図で、熟達した絵師が描いたとみられる。

「螺鈿八花鏡」（直径24・8㌢）は、鏡縁を八葉の花弁形に作り、白銅質の鏡背に螺鈿技法による文様を施したもの。正倉院に伝わる唐代の鏡が知られるが、中国国内では墓からの出土品がわずかに残るだけで、貴重な資料となっている。

「武人図」は、中国国外では初公開の実物壁画。皇帝の柩が置かれた墓室に通じる俑道の西壁に描かれていた。戟と呼ばれる武器を手にして、墓の入り口方向ににらみをきかせ、亡き皇帝を守衛していたとみられる。

展示は6月20日まで（会期中無休）。入館料は大人1200円、高校・大学生700円、小中学生450円。問い合わせは同館（0744・24・1185）。



上 貝殻をはめ込んで装飾した螺鈿八花鏡 下 被葬者を護（まも）る加彩貼金人面鎮墓獣＝陝西省考古研究院蔵

日唐関係年表

＜日 本＞

年	事項
622年	聖徳太子が死去
628年	推古天皇が死去
630年	第1次遣唐使
645年	蘇我入鹿が殺害
653年	第2次遣唐使
654年	第3次遣唐使
663年	白村江の戦い
665年	第5次遣唐使
667年	第6次遣唐使
669年	第7次遣唐使
672年	壬申の乱
694年	藤原京に遷都
701年	大宝律令が完成
702年	第8次遣唐使
710年	平城京に遷都
717年	第9次遣唐使
729年	長屋王の変
733年	第10次遣唐使
740年	恭仁京に遷都
745年	都を平城京に戻す
746年	第11次遣唐使（中止）
752年	東大寺で大仏開眼供養
	第12次遣唐使
754年	鑑真が来日
759年	第13次遣唐使
761年	第14次遣唐使（中止）
762年	第15次遣唐使（中止）
777年	第16次遣唐使
779年	第17次遣唐使
784年	長岡京に遷都
794年	平安京に遷都
804年	第18次遣唐使
838年	第19次遣唐使
894年	遣唐使廃止

＜ 唐 ＞

年	事項
618年	高祖が唐を建国
626年	太宗が即位
645年	玄奘が天竺から帰国
649年	高宗が即位
683年	中宗が即位
684年	睿宗が即位
690年	則天武后が即位
705年	中宗が復位
710年	睿宗が復位
712年	玄宗が即位
755年	安史の乱が起きる
756年	粛宗が即位
762年	代宗が即位
779年	徳宗が即位
805年	順宗が即位
	憲宗が即位
820年	穆宗が即位
824年	敬宗が即位
826年	文宗が即位
840年	武宗が即位
846年	宣宗が即位
859年	懿宗が即位
873年	僖宗が即位
888年	昭宗が即位
904年	哀帝が即位
907年	唐が滅亡

唐の十八陵

陵名	皇帝	形式	規模
献陵	高祖	墳丘	(139×110)
昭陵	太宗	山陵	九嵕山(1188)
乾陵	高宗	山陵	梁山(1048)
定陵	中宗	山陵	鳳凰山(804)
橋陵	睿宗	山陵	唐陵山(735)
泰陵	玄宗	山陵	尖山(852)
建陵	粛宗	山陵	武将山(1038)
元陵	代宗	山陵	檀山(855)
崇陵	徳宗	山陵	嵯峨山(955)
豊陵	順宗	山陵	金甕山(851)
景陵	憲宗	山陵	金熾山(873)
光陵	穆宗	山陵	堯山(1091)
荘陵	敬宗	墳丘	(56×60)
章陵	文宗	山陵	天乳山(783)
端陵	武宗	墳丘	(43×53)
貞陵	宣宗	山陵	北仲山(1004)
簡陵	懿宗	山陵	紫金山(889)
靖陵	僖宗	墳丘	(41×41)

※数字は㍍（墳丘は範囲、山陵は標高）

国際シンポジウム「玄宗皇帝と聖武天皇の時代」――5氏報告

古代ロマン謎解く

平城遷都1300年を記念して国際シンポジウム「玄宗皇帝と聖武天皇の時代」（平城遷都1300年記念春季特別展「大唐皇帝陵展」実行委員会主催、毎日新聞社後援）が9日、奈良市のなら100年会館中ホールで開かれた。7〜9世紀に遣唐使を通じて盛んな交流があった中国・唐と日本。唐の皇帝陵と高松塚、キトラ両古墳の比較などについて、日中の研究者5人が意見を交わし、集まった考古学ファンら約300人が耳を傾けた。内容を報告する。【文・高島博之、山成孝治 写真・小松雄介】

日中の研究者が参加し、和やかな雰囲気で進められたシンポジウム＝奈良市のなら100年会館で

＜シンポジウム参加者＞

【発言者】

張蘊（ちょううん）・陝西省考古研究院部長

張建林（ちょうけんりん）・同研究院副院長

韓釗（かんしょう）・西安碑林博物館副館長

百橋明穂・神戸大教授

武田佐知子・大阪大教授

【コーディネーター】

菅谷文則・奈良県立橿原考古学研究所長

【通訳】

徐光輝（じょこうき）・龍谷大教授

蘇哲（そてつ）・金城大教授

恵陵は準皇帝クラス

張蘊氏

「唐譲皇帝・恵陵の等級に関する考察」

恵陵の被葬者は、第五代皇帝・睿宗の長子だった李憲です。李憲は政変などで皇帝にはならず、弟の玄宗に皇帝を譲りました。玄宗は李憲の死後、李憲に「譲皇帝」という諡を贈り、睿宗が葬られた橋陵の近くに墓を造営しました。

発掘調査は、00年3月から01年まで10カ月間行いました。墳丘は60㍍四方で、高さは14㍍です。墳丘は二重の塀で囲まれ、内側の区域を内陵園、外側を外陵園と言います。恵陵の内陵園は、南北252・5㍍、東西217・5㍍。内陵園の南門から延びる神道には、獅子や馬、人などの石像が並んでいました。二重の陵園があることや南門の外側の石像群の配置は皇帝陵と同じです。しかし、陵園の大きさや石像は皇帝陵より小さく、準皇帝クラスです。

墳丘の中に副葬された「陶俑」（人物や動物をかたどった陶器製の像）は、今回の特別展に多く展示されていますが、大きさや種類は皇太子の墓と同等です。また、青龍や白虎などを描いた壁画（特別展で模写を展示）は、描かれているものの構成や大きさから皇帝陵の規格に値しています。このように、恵陵は非常に複雑な規格で構成されており、譲皇帝の身分の李憲の墓らしいものになっています。

4段階 影響与え変化

張建林氏

「唐皇帝陵における陵寝制度の発展と変遷」

陝西省には、東西150㌔の間に最後の2人の皇帝を除く18陵と二つの祖陵があります。この4年の間に、高宗（三代皇帝）の乾陵などで、ボーリング探査や部分的な発掘、全面的な測量を行いました。結果を総合すると、唐皇帝陵の変遷過程は以下の4段階になります。

まず、第1段階は、初代・李淵の献陵と二代・太宗の昭陵です。自然地形を巧みに利用し、「山に因りて陵を為す」先駆けになるなど、以後の時代に影響を与えました。

第2段階は盛唐期、三代・高宗の乾陵、四代・中宗の定陵、五代・睿宗の橋陵までで、陵園の制度が形成される最も重要な時期です。平面形は方形になり、石馬など石刻品の組み合わせも定式化しました。

第3段階は中唐期の九代・玄宗の泰陵から十五代・穆宗の光陵までです。前段階の形式を踏襲しつつ、石刻品は大量化するものの、寸法は小さくなり、陪葬墓の数も減少します。

最後の第4段階は十六代・敬宗の荘陵から二十一代・僖宗の靖陵まで。888年に葬られた僖宗の靖陵は、石獅子の高さは1㍍、石人は2㍍に及ばず、陪葬制度は消失していきます。

貴人等級表す冠の花

武田佐知子氏

「遣唐使・粟田真人の冠から見た古代礼服の冠について」

粟田真人は701年の大宝令の選定に力を尽くし、翌702（大宝2）年に遣唐執節使に任じられました。唐に対し、大宝律令が完成したことを披露し、律令が備わった国だとアピールすることが任務でした。

古事記や日本書紀を見ても、古代日本の被り物は常に、花をモチーフにしています。植物を頭につけ、その生命力に感応して、人の命が長く続くよう祈念したと考えられます。これは冠の制度が導入されると、形を変えて引き継がれます。旧唐書倭国伝には、貴人が被る錦の帽子に、左右に数本ずつ金銀の8寸にも及ぶ花をさしていたという記述があります。花の茎の数によって貴賤の等級を表していました。

冠の周囲に造花を飾る風習は、8世紀初頭に冠位制が廃止され、一律に黒い頭巾を被ることになっても、礼服の冠として残りました。さらに、この冠が廃止されても、宴会に臨む諸臣は一律に同じ花を頭にさしました。5月の節句に、菖蒲を鬘につけて来ない者が、宮中に入ることを禁じる命令も出されています。

聖武天皇が732年、初めて中国の皇帝の制度にならって冕冠、冕服を身につけました。しかし、全く中国と同じであってはならないと、古来の特徴の一つとして、花を飾るという風習を取り入れていました。

十二支像 日本で変形

百橋明穂氏

「高松塚・キトラ壁画墓と中国の壁画墓」

高松塚古墳やキトラ古墳などの多くの終末期古墳が藤原京の南にあります。その中に天武・持統天皇合葬陵や、その孫の文武天皇陵があります。一帯は天武、持統、文武天皇にかかわる墓域で、高松塚とキトラは3代の天皇にかかわる人の墓と推測します。

高松塚とキトラの四神を比較すると非常によく似ています。四神は北壁に玄武、東壁に青龍、南壁に朱雀、西壁に白虎が描かれます。違うのは、高松塚の白虎は頭を南側に向けますが、キトラは北向きです。

中国の古い鏡に描かれた四神を見ると、古いものは白虎は南を向いています。しかし、時計回りに十二支像がともに描かれるようになると、白虎が北向きになり、四神すべてが時計回り方向に頭を向けるのです。十二支像は高松塚にはありませんが、キトラにはあるため白虎が北向きになったとみられます。

両古墳の青龍と白虎は、長い尾を後ろ脚に絡めており、中国にはあまりない図柄です。しかし、唐代の譲皇帝・李憲の恵陵や、二十一代皇帝・僖宗の靖陵の出土品には同様の特殊な図柄があり、中国から伝わったと考えます。また、中国の十二支像は武器を持つことはありませんが、キトラの場合は持っています。日本では仏教の十二神将と混同し、変形させた可能性があるのではないでしょうか。

日中の天文図は酷似

韓釗氏

「日中壁画墓における天文図・四神図・十二支像」

中国の壁画墓は漢代に始まり、魏晋南北朝時代を経て隋唐時代に最高峰に達しました。日本の本格的な壁画古墳は、奈良県明日香村のキトラ古墳と高松塚古墳で、中国の隋唐時代に相当します。

キトラ古墳の天文図と獣頭人身十二支図の発見は、日本の古墳壁画の源流や発展の歴史、中日文化交流に関して非常に重要な意味を持っています。

キトラ古墳の天文図に描かれた星は300以上確認されています。中国・河南省洛陽にある北魏時代の元乂墓（526年）で見つかった天文図にも300前後の星が確認され、キトラ古墳に似ています。ともに実際の空の様子を表現しています。

古代中国の壁画墓の天文図には2系統あるという研究があり、一つが元乂墓の系統、もう一つが西安交通大学内の前漢代の墓で見つかった天文図の系統です。装飾性があり、高松塚古墳の天文図はこちらの系統に属すると思われます。

中国で十二支は後漢時代には成立していましたが、擬人化した獣頭人身十二支を壁画にしたものは唐代の8世紀半ばが一番古く、キトラ古墳の方が先に描かれています。獣頭人身十二支図としては、キトラ古墳は東アジアで最古と言えます。